

【教育目標 げんきいっぱい えがおいっぱい いきいき表現する子ども】



きらきら

新潟市立沼垂幼稚園
園だより
令和4年12月16日発行

世界に一つだけの「オズの魔法使い」

園長 青木博子

先日、年長組の生活発表会が行われました。

沼垂幼稚園の生活発表会は、当日も含め、発表会に至るまでのプロセスが、すべて学びです。ストーリーや配役、衣装が予め決まっています、動きやセリフを一言一句間違えずに完成度を高めていくことを求めるものではありません。お話を楽しむ気持ちが高まり、発表会でたくさんの人に楽しんでもらいたいという共通の目的をもつ。どのように表現するかを考えたり、試したりする。毎日、課題を解決し、劇遊びを更新していく。そのプロセスこそが重要なのです。そして、発表会が終わっても、活動は続くのです。

今年の年長児は「オズの魔法使い」のお話が大好きになり、劇と影絵の二部構成にすることに決めました。それを見事にやり遂げた子どもたちの舞台裏を紹介します。



影絵に挑戦する

フィルムに描いた絵を OHP で投影して物語遊びをしていたことから、影に興味を持ち、今回の挑戦となりました。しかし、スクリーンに近づきすぎると影が小さくなり、遠くで演技すると大きくなりすぎてしまいます。また、人数が多すぎるとごちゃごちゃして、何をしているのか分からなくなるので、子どもは人数を少なくすることに決めました。さらに、ある子どもが、影が最も分かりやすく見える立ち位置が分かるように、テープで目印の線を引くとよいことに気付きました。みんなも賛成して、立ち位置を決めました。



友達に寄り添い抜く

発表の3日前、ある役を一人で演じていた子どもが、一人で演じることが少し心配になりました。そこで、担任が子どもたちに伝え、「ぼく、その役やってもいいよ」と手を上げた友達がいました。友達が一緒に演じてくれることを知った子どもはとても喜び、安心していました。その後あっという間に、ほかの友達がその役の帽子をつくりました。またほかの友達は、その役の小道具をつくりました。

お休みをされていて、練習に参加できなかった子どもが登園した日は、年中児に劇を見せよう日でした。一緒にその役をやることになっていた友達は、まずその子どもに、お面の作り方を教え、一緒に作り、動きをやって見せました。あっという間に、楽しく協力して作り上げ、年中児に見せる時間に間に合ったのです。

息を合わせる

オズを演じるために、4人の子どもが息を合わせました。まず、オズをゆっくりと移動します。スクリーンにぶつからないように1人がゆっくりと誘導します。大道具で表現したオズは、瞼や眉毛、口が動いて、本当に話しているかのようです。オズの顔を動かすために2人が中に隠れて動かします。魔法使いの声は別の子どもが担当します。オズの落ち着いた低い声が見事に表現されていて、オズのすばらしい動きとぴったりと合っていました。



鈴の音

登場人物のおばあさんは、鈴を鳴らしながら歩いてくる設定でした。しかし、セリフを言いながら鈴を鳴らすことは難しいことでした。すると、ある子どもが「私が鈴を鳴らすよ」と言いました。劇では、おばあさん役の様子を見ながら、ぴったりと息を合わせて鈴を鳴らしました。おばあさん役の子どもも、鈴の音を感じながら見事に演じていました。

衣装の模様

ある子どもは、基になった紙芝居の絵が気に入って、衣装の絵を紙芝居の絵とそっくりに忠実に再現しようとしてしました。制作に要した日数は3日間。友達と劇を創り上げる時間とは別に黙々と作り続けました。思い入れのある衣装ができました。

役になり切る

子どものセリフはほとんどがアドリブです。ある子どもは、自分が演じた人物の悔しさを表すセリフを見事に表現しました。また、悔しそうに手を振り、足を踏み鳴らす動作で表しました。このセリフと、動作は毎日少しずつ変わっていきました。ブリキの木こりの動きは、まるでゼンマイ仕掛けのおもちゃのように、手足の動きを工夫し、視線を動かさず表現しました。物語の大きな流れの中で、その瞬間、自分の役を生き抜いていたのです。

全体を見る

ある子どもは、劇が始まると全体を見ていました。みんなが声をそろえて言うところでは、入りをうまく合わせられるように、目や声で全員を導いていました。全員が一緒に動くところでは、その子どもの動きを中心に、自然と周りの子どもの動きがそろって、美しい動きが生まれていました。また、話の流れが途切れたら、誰にも気づかれないようにそっと目配せしたり、手を添えたりして支えていました。

子どもたちは自分たちで決めて、自分たちの力で創り上げていきました。みんなの目的の実現に向けたプロセスで、子どもは、自分のやりたい気持ちも、できないことや心配な気持ちも安心して出しました。すべての子どもが、楽しんで、考えて、工夫して、話し合い、支え合って創り上げた、世界に一つしかない「オズの魔法使い」。

その舞台裏を知り、子どもたちの努力の過程を見続けてきた私は、その日、演技を見ながら涙がとまりませんでした。